

## 博士論文審査および最終試験報告書

### 満洲日系高等教育研究機関と戦後同窓会に関する歴史社会的考察 ——卒業生による戦後の活動および各同窓会における満洲記憶について——

提出者 韓美怡

#### [論文の内容の要旨]

旧満洲（中国東北）の日系高等教育機関では、多様な出自の学生、すなわち日本人、中国人（「満系」）、朝鮮人（当時は日本国籍）、台湾人（当時は日本国籍）、モンゴル系、白系ロシア人等々が同じ教室でともに学び、同じ学生寮でともに生活した。1945年の日本の敗戦および「満洲国」の崩壊後、多くの教職員や日本人学生は日本に引き揚げたが、帰国後、終戦・引揚に関する善後処理を目的として多くの同窓会が設立され、その後は親睦の目的で活動を継続した。他方、満洲高等教育機関で学んだ日本以外の様々な出自の学生たちは、「満洲国」崩壊と満洲日系高等教育機関の消滅後、自らの国・地域に戻り、それぞれの社会においてさまざまな活動を展開し、そのなかで同窓と連絡を取り、さらに自らの社会ではエリートとして活躍した。日韓国交回復（1965年）、日中国交正常化（1972年）を前後して、戦後同窓会は、国際的な技術交流活動や訪問活動などを通じて、日本と隣国との間で友情と交流の架橋としての役割を担った。

本論文は、このような満洲日系高等教育機関の戦後日本同窓会および中国・台湾・韓国の同窓生を対象とし、かれらの「満洲記憶」の特徴およびその差異を分析することを目的としている。さらに、この目的のため、本論文では、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」理論とピエール・ノラの「記憶の場」という歴史社会学理論を用いて同窓会と同窓生の「満洲記憶」をめぐる相互作用について考察し、植民地教育経験者の異なる歴史認識を分析し、記憶の連続性と多様性を明らかにしている。

以下本論文の構成を示す（項以下は省略）。

#### 序章

- （一）問題意識と研究目的
- （二）研究史概観
- （三）研究課題と方法
- （四）各章の内容および分析視角
- （五）史料状況

#### 第一部 満洲国の高等教育機関とその同窓会——歴史学的概観

##### 第一章 満洲国の高等教育機関政策と高等教育機関

第一節 満洲国における高等教育機関

第二節 関東州における高等教育機関

## 第二章 各教育機関の概要と同窓会の特徴

第一節 戦後同窓会の規模

第二節 戦後同窓会の活動の特徴——輔仁会を中心にする

第三節 戦後同窓生のキャリア——輔仁会を中心にする

第四節 戦後同窓会と外交関係

第五節 語りと記憶

## 第二部 満洲建国大学とその同窓会

### 第一章 建国大学の概要

第一節 満洲国の建国理論と建国大学の創設

第二節 建国大学の概要

### 第二章 建国大学とイデオロギー

第一節 建国大学の創立者たちのイデオロギーと建国大学の建学

第二節 建国大学教育者のイデオロギー

第三節 建国大学学生の自己認識（中国人学生を主として）

### 第三章 建国大学における反満抗日運動

第一節 日系高等教育機関における反満抗日運動の展開

第二節 学生読書会と反満抗日運動

第三節 反満抗日運動の影響

### 第四章 建国大学の崩壊

第一節 作田副総長の辞任——管理層の問題

第二節 建国大学における学生間の軋轢

第三節 回想文集に記録された建国大学の崩壊

### 第五章 建国大学の同窓会

第一節 同窓会の概況

第二節 建国大学同窓会と国際交流

## 第三部 理論的考察

同窓会の語りと記憶再構成

集合的記憶の理論展開と記憶の場理論

### 第一章 同窓会報における満洲記憶

第一節 所属組織別で考察された会報

第二節 時代別で反映された内容

### 第二章 日本人同窓生の語りと記憶

第一節 満洲大陸に対する語りと記憶

第二節 引き揚げの記憶

第三節 思い出、物故者に対する弔意など

### 第三章 中国人同窓生の語りと記憶

第一節 反満抗日運動

第二節 中国革命に参加する

第三節 新中国建設への貢献

### 第四章 他の出自の同窓生の語りと記憶

第一節 台湾同窓生の語りと記憶

第二節 韓国同窓生の語りと記憶

## 結論

本論文は、上に見られるように、序章、第一部「満洲国の高等教育機関とその同窓会——歴史学的概観」、第二部「満洲建国大学とその同窓会」、第三部「理論的考察」、結論から構成されている。

序章では、前述したような本論文の問題関心を述べた上で、満洲日系高等教育機関やそこで発生した反満抗日運動などに関する研究史を概観し、満洲日系高等教育機関に関する史料状況を確認している。

第一部では「満洲国」の高等教育機関とその同窓会を歴史学的に概観する。まず第一章では満洲教育の歴史を「関東州時代（満鉄時代）」と「満洲国時代」の二つに分け、旅順工科大学・満洲医科大学・哈爾濱工業大学・新京工業大学・建国大学を代表例とする高等教育機関の発展を概説する。第二章では、関東州時代・満鉄時代も含め、さまざまな教育機関の歴史や機能、学生・教職員の出自、戦後同窓会の特徴を分析する。とくに同窓会の部分では、同窓会の歩み、同窓会活動の特徴、同窓生がたどったキャリアと相互のネットワーク、同窓会の海外での活動状況などを考察している。本章ではこうした分析を通じて、同窓会の語りと記憶の関係にも触れており、そのことは同時に第三部の「理論的考察」に素材を提供するという意味をも有している。

第二部「満洲建国大学とその同窓会」では、「満洲国」の国策大学である建国大学をケースとして取り上げ、考察と分析をおこなっている。建国大学では、「五族協和」という「満洲国」の国策を体現し、学生の出自も多様であった。そのため、建国大学の同窓会は、満洲日系高等教育機関のもっとも代表的な例として説明することができる。第一章では建国大学の概況、第二章では建国大学のイデオロギー、第三章では建国大学における「反満抗日運動」、第四章では同窓会が刊行した私家版史料に記録された「満洲国」と建国大学の崩壊を紹介する。第五章では、建国大学の戦後同窓会活動の特徴と戦後同窓会による海外同窓との国際交流の状況を考察する。どの項目をとっても、日本人、中国人、朝鮮人、台湾人同窓の記憶が一樣ではなく、それぞれの学生が建国大学の異なる側面に記憶を集中させていたこ

とが印象的である。

第三部は「理論的考察」の部分であり、歴史社会学分野の理論を用いて同窓会と同窓生の「満洲記憶」をめぐる相互作用について分析する。具体的には、フランスの社会学者モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」理論とピエール・ノラの「記憶の場」理論に依拠しつつ、「記憶」と「歴史」の対立・統一関係を分析する視座から、同窓会の語りと記憶が再構成されるメカニズムを考察する。「集合的記憶」理論は、ある集団への所属は人間の意識によって決まると考える。さらに、人々は時間に関連する固有の活動形態（伝統、過去の崇拝など）を通じて人間社会の秩序と進歩を刺激する傾向があるとされる。これを「満洲記憶」に適用すれば、同窓会では様々な同窓生たちが自らを代表しうる「集団」を形成する傾向にあり、同窓会の小さな社会の継続性と変化のために、ある特定の「共通意識」を発展させる。同窓生の活動の内容や形態の変化により、「満洲記憶」が継続的に増殖され、または削除される。本論では、同窓会会報や会誌に発表された中国、台湾、韓国など他の国や地域の同窓生の寄稿や、日本国外の同窓会（数は少ない）の活動、そして海外同窓会から刊行された回想文集からこうしたプロセスを析出する。

ノラによれば、人間に「記憶の場」があるのは、記憶を保存するためである。同窓会は同窓生の「満洲記憶」が発生する場所であり、その意味で「記憶の場」と見なすことができる。日系同窓会は同窓生が記念活動を行う場所として「満洲記憶の場」と見なすことができる。ノラは、記憶の場の誕生とともに、自然な記憶はもはや存在しなくなると考える。このため、日本人同窓生が戦後同窓会を作ろうとする行動は、満洲記憶を置く場所を作って守ろうという意識の現れであるとする見方が出来る。他方、この記念意識がなければ、記念すべきものが失われ、満洲記憶もすぐに公式的な「歴史」により一掃されてしまうことになる。本論文によれば、戦後同窓会は、一方で自分たちの「満洲記憶」を遡らせ、「満洲記憶」を生み出す場所を提供するものであり、他方ではその記憶を再構成する源を提供した。日本、中国、韓国、台湾などの同窓生たちは、同窓会活動を通じた相互交流において、相互の歴史認識上の距離に直面し、自分たちの固有の「満洲記憶」についてもう一度自己省察的に振り返ってみる必要があることを自覚したとされる。

本論文は、以上の考察の結論として、以下の点を挙げている。

第一に、「同窓会」は「満洲経験」の一つの「記憶の場」であった。戦後、旧満洲日系高等教育機関の同窓会は、「満洲経験」が語られる場として、日系同窓生に帰属感とアイデンティティを与えた。同窓会自体が「記憶の場」として、満洲記憶を保護し守る機能を有していた。

第二に、同窓会是个々の同窓生集団が「集合的記憶」を形成する条件を与えた。所属組織別の同窓会会報・会誌、回想文集は、すべて特定の集合的記憶を反映していた。同窓生が異なる「集団」に分割されると、個々の集団は異なる「記憶」を持つに至った。このような多様な「集団」は、それぞれに歴史的事実と特定の「記憶」を「再構成」した。

第三に、「集合的記憶」を生み出す集団は、時間の経過や本国の政治情勢、あるいは国際

政治情勢の変化などにより、再編成されることもあった。

第四に、戦後の満洲における日本の高等教育機関の同窓会の形成と活動の過程において、歴史的状況の変化と発展に伴い、同窓生の集団が変化すると「集合的記憶」も変化した。

第五に、同窓会の集合的記憶は特定の社会の集合的意識のなかで「再発見」されることが可能であった。建国大学の中国人同窓生の場合、彼らの在学中の「反満抗日運動」の記憶は、中華人民共和国建国後の中国社会の日中戦争に対する価値志向すなわち公的記述に適合したため、1990年代には中国政府の所属機関による建国大学に関する回想文集が出版され、それにより中国の同窓生の記憶は「再発見」された。

第六に、「記憶の場」は、ある伝統に生きる個人が所属意識を見いだす事ができるシステム、つまり社会的集団の一員となる可能性を実感できるシステムである。同窓生、特に海外の同窓生は、戦後日本の同窓会に参加し、そこで母校の歴史を学び、覚え、母校の伝統を文化として共有した。集団が物理的に消散してすべてのメンバーが去っても、その過去の経験が伝統として記憶された。

第七に、戦後数十年の日本と近隣諸国との友好関係の樹立と発展に際し、同窓会は大きな貢献をなした。同窓会という「満洲経験の記憶の場」は、さまざまな国や地域の同窓生の「集合的記憶」の変容をマクロなレベルで促進し、「再構成された満洲記憶」は、異なる、または敵対的な立場にあった同窓生を助けて、新しい時代、新しい社会に適合し、新しいつながりを生み出した。このようなつながりは、かつて日中、日韓の間の国際関係に、民間の分野での良好な相互作用と雰囲気をもたらした。

## 〔論文審査の結果の要旨〕

本論文は、以下の四点において高い学術的な価値を持ち、学界に寄与するところ大であると判断する。

第一に、テーマ自体のオリジナリティである。満洲記憶に関するいままでの研究は、主として「満洲国」協和会会員や、満蒙開拓少年義勇軍およびそれに続くいわゆる大量の満洲移民、「満洲国」官僚などが有した記憶（しかも主として敗戦の混乱や引揚げの記憶）などに集中していたが、本論文は、満洲日系高等教育機関の同窓生および同窓会に焦点を合わせており、その着眼は独創的で、学術的な評価に値するといえる。すなわちさまざまな民族集団から構成された満洲高等教育機関の同窓が持つ記憶は、多くの集団の「集団的記憶」が交差し、また葛藤する場であり、そうした集団的記憶はたんなる一国的な経験の記憶を超えて存在していた。さらに戦後同窓会は長い期間にわたって存続したため、「集団的記憶」が蓄積し、強化され、変容し、ときには削除されるダイナミックなプロセスを析出するための格好の素材を提供するものとなった。

第二は、史料面でのオリジナリティである。現在までの学界でおこなわれてきた満洲記憶に関する研究は、主として満洲体験者の帰国後の回想録やオーラルヒストリーを史料として用いていた。しかし歴史の進行とともに、経験者は減少し、今後は文献研究を重要視しなければならない時代になっている。本論文は、旅順工科大学、満洲医科大学、哈爾濱工業大学、新京工業大学、建国大学などの同窓会報、記念誌など膨大な私家版史料を発掘・利用しており、学術的な歴史研究として先行研究の史料水準を凌駕しているということが出来る。こうした私家版史料は、市場に出回るような性質のものではなく、一般社団法人国際親善協会、公益財団法人東洋文庫などに分散的に所蔵されているが、著者韓美怡氏は、さらに玉川大学教育博物館に収集されている大量の私家版史料を網羅的かつ丹念に調査した。玉川大学教育博物館にこうした私家版史料が収集・所蔵されていたこと自体は、著者韓美怡氏および本論文にとってはある意味で幸運ではあったが、そうした幸運を活かしながら発掘・調査を継続した努力は大いに評価されるべきである。

第三に、本論文では、フランスの社会学者モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」理論やピエール・ノラの「記憶の場」理論などの社会科学理論を大胆に持ち込んで分析を進めている。満洲記憶をめぐっては、今まで、オーラルヒストリーの方法や歴史学の方法を用いていわば人文科学的な研究が進められてきたが、本研究は、社会科学理論を利用することにより、満洲記憶といういわば個別の一次的記憶を「集合的記憶」「記憶の場」の一般理論のなかに位置付け、他の国や地域、他の集団の歴史記憶と比較分析をおこなう地平を開くものである。さらにそれは、歴史記憶に関する国際的な対話を可能とするものであるともいえる。

第四に、本論文では、日本語・中国語・韓国語・英語の文献を利用して、さまざまな出自の同窓生、つまり日系・中国系・台湾系・韓国系の同窓が有する集合的記憶を、たんに一国

的な視点から考察するに留まらず、広く東アジアという観点から比較検討しており、この点は、いままでの先行研究に見られなかった大きな特徴であるといえよう。ここには、中国語を母語としつつ、韓国・日本で留学生活を送った著者韓美怡氏の豊かな語学力が遺憾なく発揮されているといえる。

以上の点を考慮すれば、本論文は、成城大学大学院法学研究科が求める博士論文の六つの基準、すなわち 1) 研究テーマの妥当性、2) 先行研究の取り扱いの適切性、3) 論旨展開の明確性、一貫性、4) 文献、資料の引証の適切性、5) 当該研究分野の発展への寄与、6) 自立した研究活動能力、をすべて満たしていると判断される。

もっとも、本論文にもいくつか不十分な点があることも事実である。

第一に、注記の方法や巻末の文献リストに不統一ないし不完全な部分が残っており、一層の改善が望まれる。第二に、第一部・第二部の歴史的叙述には「第一次史料」すなわち同時代の行政文書、外交史料、新聞資料、警察資料などを利用する余地があると見受けられる。第三に、理論的分析枠組み自体の研究を、学界での議論等を踏まえながら、さらに深める必要があろう。第四に、さまざまな登場人物のパーソナル・ヒストリーにも紹介が及んでいたら、考察に一層の深みが出てくるのではないと思われる。

しかし、以上のような点は、本論文の学術的価値を損なうような性質のものではなく、今後著書ないし論文の形で活字化を進める際に十分補うことが出来るものと考えられる。

[最終試験の結果の要旨]

審査委員3名は、2021年1月28日に、論文内容を中心に関連ある事柄について最終試験をおこない、合格と認めた。

[論文審査委員]	主査	法学研究科教授	田嶋 信雄
	副査	法学研究科教授	川崎 恭治
	副査	法学研究科准教授	福田 宏